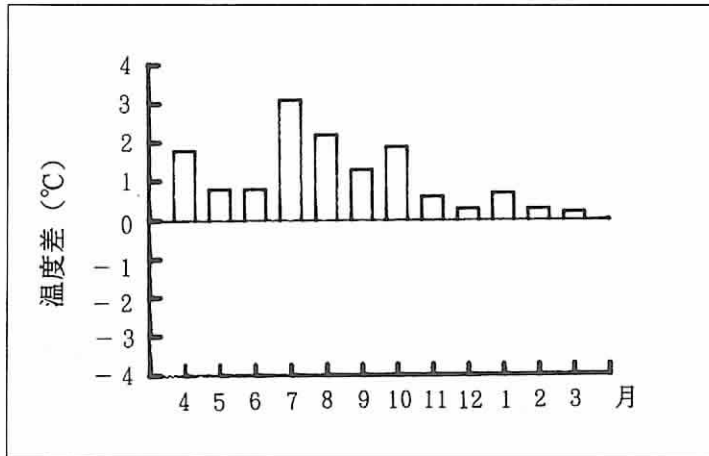


第8節 気象

神奈川の気象特性

- 春 季 本州付近を移動性高気圧が広く覆い、気圧傾度が緩やかになると、沿岸部では海陸風が発生する。4月下旬になって気温が上昇し、大気が安定すると、海陸風の発生とあいまって光化学大気汚染の発生する日がでてくる。
- 夏 季 関東地方は、6月中旬から梅雨に入り、本州南岸に前線が停滞する気圧配置となると、前述7節で記述した酸性雨の発生しやすい気象条件となる日がでてくる。7月中旬の梅雨明け後は、太平洋高気圧に覆われ、海陸風の発達が顕著となる。この時期大気が安定すると光化学大気汚染が発生しやすくなり、年間で最も多い時期となる。
- 秋 季 太平洋高気圧の勢力が衰え、高気圧・低気圧の去来が活発となる。また、本州南岸に秋雨前線が停滞すると秋の長雨になることがある。10月下旬までは、高気圧に覆われて気温が上昇すると海陸風が発生し、晴れて大気の安定した日には、光化学大気汚染の発生をみることもある。
- 冬 季 年間で最も雨量が少なく、晴天が続くため、空気が乾燥する時期となる。また、風が弱い晴天時には、放射冷却も加わって大気下層が安定するため、二酸化硫黄・窒素酸化物等の一次汚染物質が滞留しやすい状態となり、年間で最も濃度の高い時期となる。

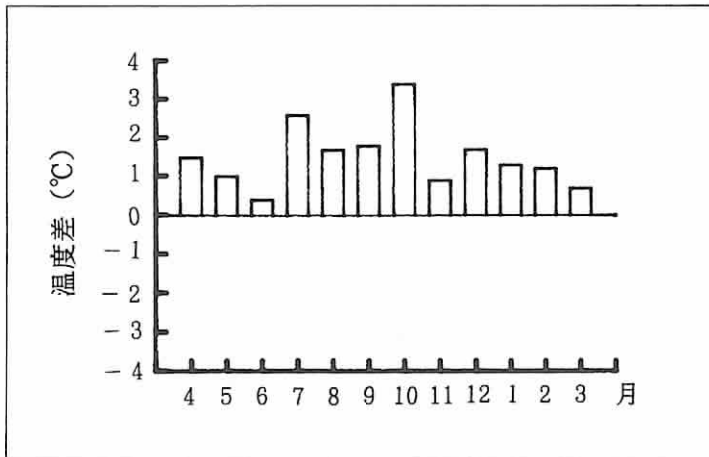
8. 1 日最高気温の年平均偏差（月間平均値）



（資料：横浜地方気象台）

日最高気温の月平均値で見ると全月平年を上回っており、特に7月、8月は高く猛暑だったことを示している。

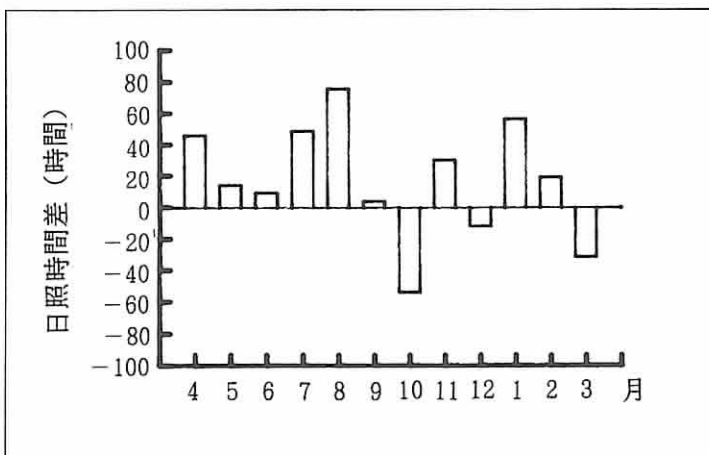
8. 2 日最低気温の年平均偏差（月間平均値）



（資料：横浜地方気象台）

日最低気温の月平均値で見ると、日最高気温と同様全月平年値を上回っている。

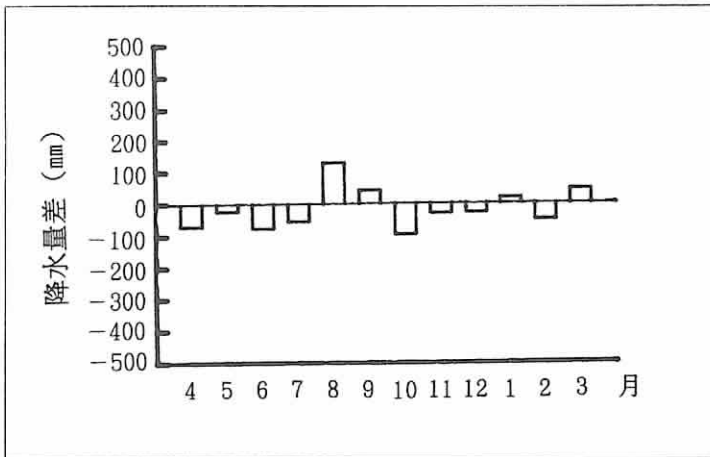
8. 3 日照時間の年平均偏差（月間値）



（資料：横浜地方気象台）

日照時間の月間値は、7月、8月及び1月に特に多く、10月に特に少なかった。

8. 4 降水量の平年偏差（月間値）

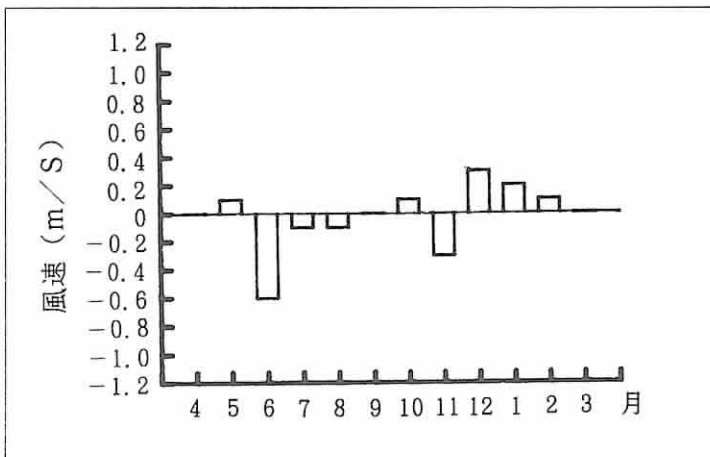


平成6年度は8月に平年と比較して降水量が多かったが、全体的に平年値をやや下回った。

通年では、平年より176mm少ない1393mmであった。

（資料：横浜地方気象台）

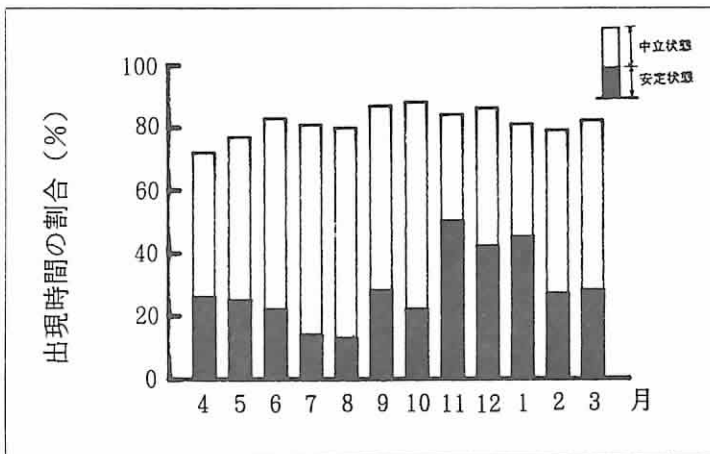
8. 5 風速の平年偏差（月間平均値）



平成6年度の月平均風速は、12月から2月に高く、比較的風の強い日が多かったことを示している。

（資料：横浜地方気象台）

8. 6 下層における大気安定度の推移（月間の安定度別時間数）

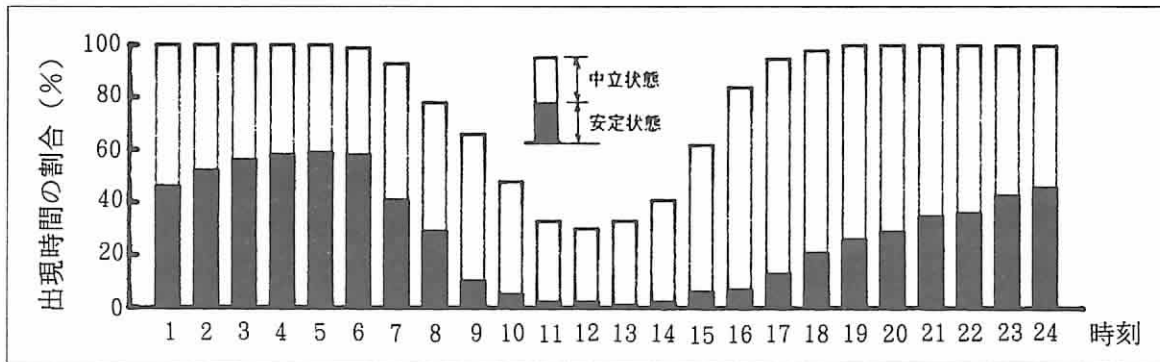


下層大気は冬季に比較的安定しやすく、平成6年度は11月に安定状態の出現時間の割合が最も高くなっている。

図は、横浜市鶴見区にあるTVK鶴見において毎時間測定している垂直方向の温度差の測定結果から月ごとに求めた大気安定状態及び中立状態の出現割合を示す。

1000mあたりの気温減率が -6°C 以上のときを安定、 -6°C 未満 -10°C 以上のときを中立とした。

8. 7 下層における大気安定度の時間帯別出現頻度（年間）

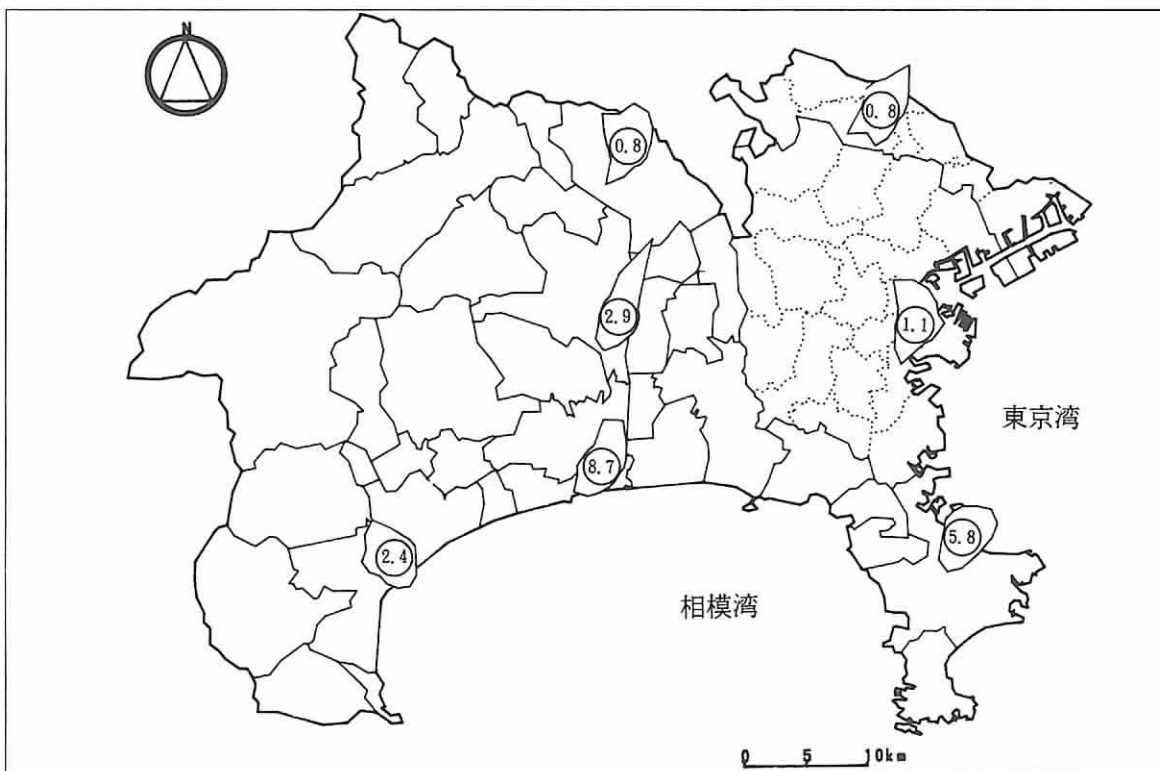


図は、横浜市鶴見区にあるTVK鶴見において毎時間観測している垂直方向の温度差の測定結果から時間帯別に求めた大気安定状態及び中立状態の出現割合を示す。

地上100m前後の大気は深夜から明け方にかけて安定しており、日の出とともに急速に不安定な状態となる。

不安定な状態は日中続き、夕方から次第に安定度が増している。

8. 8 風向頻度の地域分布（年間）



図は、毎時間連続観測している風の測定結果から測定局ごとに求めた出現頻度を示す。なお、円内は無風の割合 (%) を示す。

日本付近は、冬季に北西の季節風が、また夏季に南西の季節風が卓越する。

県下の東京湾沿岸部では、北東と南西方向の風が多く、県中央部では相模川沿いの南北方向の風が多い。